

## 「学史資料」がつなぐ、大学史センターと 大学美術館

熊澤弘（平成6年芸術学科卒業）

### 序

「対象としている“モノ”によって・・・（学芸員の）職務は決まる。学芸員の主たる関心事が何であれ、彼らは個々の作品の作者、様式、意味、状態、以前の所蔵者、文献調査、展示等に責任を持つのである」<sup>1</sup>

これは、メトロポリタン美術館のオランダ絵画部門学芸員であったウォルター・リートケ（Walter Liedtke, 1945–2015）が生前残した言葉である。美術館の所蔵作品の管理・調査研究を行う筆者にとって、所蔵品の「中身」に対して徹底的に責任を持つべきだ、と訴えるリートケのこの台詞はとても説得力に満ちたものに感じられる。この言葉はもちろん、レンブラントやフェルメールなどのメトロポリタン美術館所蔵の名作の「世話をする」という稀有な立場であるからこそ出てきた、いわば綺麗事かもしれないが、博物館・美術館の現場で収蔵品管理・調査研究を担う同窓の学芸員・キュレーターの方々にも、この言葉に重いアリティを感じる方はいらっしゃるだろう。

近現代美術史・大学史研究センター、通称GACMAと大学美術館との関係についての小文を寄稿するに際し、筆者が最初に思い起こしたのが、リートケによるこの台詞であった。博物館・美術館の所蔵品を調査・研究する場合に、作品・資料それ自体とともに、その資料と関連付けられる「情報」が重要となることはいうまでもないが、東京藝術大学大学美術館が所蔵する作品・資料における「情報」として最も重要なものが、美校・藝大の歴史や歴代学生の事歴などの「学史記録」である。そしてその学史記録の管理を担う存在こそが、GACMAなのだ。

この小文では、大学美術館所蔵品、通称「藝大コレクション」と、大学史資料との関係性に目を向けながら、GACMAと大学美術館の接点をご紹介したい。

### 1. GACMAと大学美術館：コレクションの親和性

近現代美術史・大学史研究センター、通称GACMAは、本学美術学部の「歴史的・文化的に重要な資料」、すなわち東京美術学校（「美校」）以来の記録文書や教職員・

卒業生および関係者から寄贈された大学史関連資料を収集、保存、管理するため、令和2年1月に設置された組織である。これらの文書・資料が、美術史的に、大学史的にどれほど重要なものであるかは改めて説明することはないだろう。GACMAの展開によって直接的に恩恵を受けるのが、東京藝術大学大学美術館（以下「大学美術館」）と言えるだろう。大学美術館もまた、美校開学以来の伝統を持つ本学の「芸術資料」の調査・収集・保存及び管理、展示公開を行う組織であり、GACMAは「ドキュメント」を、大学美術館は「芸術資料」を、という違いはあるが、ともに美校から藝大へと続く「モノ」を管理し、その意義を伝え、継承していく組織である。

### 2. 「教材」「記録」としての藝大コレクションと

大学美術館所蔵の芸術資料——近年では「藝大コレクション」とも称している——の総体を見ると、内容は多種多様かつ規模は極めて大きいものだ。古今東西の名品を含む絵画・彫刻・工芸・デザイン・現代美術の美術作品とともに、標本類や建築模型、音楽関係資料など、多種多様な収蔵品を含み、その規模は令和4年11月現在時点で3万件を超える。

この藝大コレクションには一般的な博物館・美術館とは毛色の異なる特徴がある。それは、「教育への活用」と「学生作品の保存」が重視されている点である。第一の点は、教育・研究の参考品として芸術資料が収集・活用されていることだ。「参考美術品の収集」という美校設立時の教育方針により、古美術品や近代美術の名品——《絵因果經》（国宝）や狩野芳崖《悲母觀音》、高橋由一《鮭》（いずれも重要文化財）など——が美校のコレクションに加えられた。これらは現在でも、「閲覧」や「臨写」などの教育現場で活用されている。もう一つの特徴である「学生作品の保存」とは、歴代学生の残した作品の収集・活用のことを指す。横山大観や大村西崖など、1893（明治26）年7月卒業時の卒業制作から始まる学生作品収集は、令和の現在も変わらず続いている。その結果、「学生制作品」として所蔵品登録される作品は1万件を超え、自画像だけでも6000件を超える規模となっている（令和4年11月現在）。これは、芸術教育・研究の場である本学ならではの特徴である。

藝大では日々、芸術教育と、その成果としての制作・展示が行われるが、それ同時に、その成果をアーカイブする

活動も同時並行的に行われている。本学にはすなわち、「創作」と「継承」が循環する、芸術教育の「エコシステム」が、本学に存在すると言ってよいだろう。

### 3. 記録から浮かび上がる卒業制作・自画像

大学美術館のコレクションは、「創作」の成果と、「継承」された作品・資料である点から、上記のエコシステムの成果の一つと言えるが、具体的なモノが残っている点において「継承」の側面がより強い。過去の授業の中で閲覧や模写の手本として活用されてきた歴史を持つ古美術作品には、美術史的な価値とともに、美術教育史、そして学史上の重要性がある。また、卒業制作や自画像には、それ自体に美校・藝大の歴史の証言、つまり学史記録という側面がある。卒業制作は多くの場合、各学科の最優秀作品として選ばれ、学校・大学買上となったものであるが、その作品は、それぞれの作者の最初期作品という美術史的な意味とともに、当時の教員たちが当該作品を選んだ、という教育成果記録という意味も持っているのだ。

記録としての重要性がより強く現れるのが、6000件以上保管されている「自画像」である。これらは、卒業制作のような選定が入らず、対象となる学年・学科の学生全ての自画像が学校側に納入されてきたものだ。その中には、将来の画風を予感させる自画像もあれば、後の展開を感じさせないものもあるし、さらに言えば、作家にとってこの一点だけしか残っていない自画像もある。そのため自画像には、単身の人物像の表現としての美術作品としての良し悪しを超えた「記録性」があるのだ。

ここまで大学美術館所蔵品の特徴を、「継承」や「記録性」といったキーワードで説明してきたが、GACMAと大学美術館に関する小文でなぜこのことを長々と説明をしてきたかというと、GACMA、そしてその前身である美術学部教育資料編纂室のこれまでの研究成果によって、大学美術館所蔵の自画像の重要性が認識されてきた歴史があるからだ。

教育資料編纂室の講師として長く活動を続けてきた吉田千鶴子氏<sup>2</sup>（1944–2018）は、本学芸術学科の大学院課程修了後に教育資料編纂室に入り、1981年から2003年の長きにわたり、『東京芸術大学百年史』の編纂の中心人物として活動した。その広範かつ精緻な資料調

査と記述により、『百年史』は、本学の枠組みを超えた日本近代美術史の重要な基礎資料となっている。そしてこの調査の過程で吉田氏は、東アジアからの留学生に関する幅広い調査活動を行い、それまで個別的に行われてきた美校留学生に関する網羅的な調査を行い、それを論考として、そして後に書籍として刊行された<sup>3</sup>。この書籍は日本のみならず中国・韓国・台湾の近代美術史研究においても重要な資料となっている。

学史にかかるこの基礎調査の成果は、大学美術館所蔵の東アジア留学生自画像に対する、特に国外からの関心の高まりからも見てとれる。例えば近年では、韓国近現代美術史研究のなかで、高義東（こうひどん 1886–1965）や金觀鎬（きむかんぽ 1890–1959）を始めとする東京美術学校の留学生の存在がクローズアップされ、日本国外で開催される展覧会に貸出される機会も増えている。2022年11月現在、アメリカのロサンゼルス・カウンティ・ミュージアムで開催されている“*The Space Between: The Modern in Korean Art*”展（2022年9月11日–2023年2月19日）では、金觀鎬による自画像と、卒業制作《夕ぐれ》（1916年、文展特選）が、韓国近代美術史のメルクマールの一つとして紹介された。これは、吉田千鶴子氏、そして美術学部教育資料編纂室のこれまでの地道な活動があつてこその成果である。そしてこのようにして、藝大が持つ様々な「モノ」が、日本および東アジア近代美術史の重要なドキュメントとして、歴史のなかに登録されてゆくのである。

美術学部教育資料編纂室から組織改編したGACMAは、これまでの調査研究の蓄積をベースとして、収集された資料の再編成、研究成果公開などを積極的にすすめている。そして最近では、前述の『百年史』の美校編3巻を、GACMAのホームページ上でオンライン公開するようになった<sup>3</sup>。『百年史』といえばすでに絶版となり、近年では古書店ですら流通しなくなっていたが、それをウェブ経由でアクセス可能としたことは、日本近代美術史研究にとって重要な一里塚であろう。大学美術館に席を置く身としては、この豊かな「アーカイブ」がさらに成長することを願うとともに、大学美術館所蔵の作品・資料との結びつきをさらに明らかにしながら、日本近代美術の基礎研究を充実させてゆきたいと考える。これによって、冒頭に挙げたウォ

## 特集 GACMA 藝大の今

ルター・リートケがいうコレクション研究の要點——「(コレクションにある)個々の作品の…文献調査…に責任を持つこと——がより進み、藝大に継承された「モノ」、すなわち作品と記録の重要性が認識されてゆくからだ。

(くまさわ ひろし／大学美術館准教授)

- 1 "Curator in the Spotlight: Walter Liedtke Curator of European Paintings, The Metropolitan Museum of Art in New York (October 2009)" <https://www.codart.nl/spotlights/walter-liedtke/> (2022年11月閲覧)
- 2 吉田千鶴子『近代東アジア美術留学生の研究 東京美術学校留学生史料』ゆまに書房 2009年
- 3 <https://gacma.geidai.ac.jp/y100/>



2020年の藝大コレクション展（藝大クロニクル）での自画像展示  
左より 白瀧幾之助、青木繁、李岸、中村萬平



2019年ギャラリーヒュンダイ（ソウル）での展示  
左より 金觀鎬《夕ぐれ》、自画像：高義東、金觀鎬、金鐘禹、吳之湖、金容俊

### 復活した熱狂への接触

2022 藝祭実行委員長 安間誉和

時計針が12時10分を回った上野キャンパス、車道信号が赤になれば、都道452号線により隔たれた音楽と美術の2つのキャンパス間を学生たちが行き来し交錯する。上野のお昼休みの光景である。講義が始まれば、またそれぞれのキャンパスに戻っていく。東京藝術大学の大きな魅力の一つは、美術と音楽という領域の異なる藝術を志すこの学生たちが、時に融合するところにある。普段隔たれたキャンパスでそれぞれの藝術を追求する2学部14学科の学生が、絹交って触れ合う場、延いては拠り所とする場、それこそ藝祭である。ところが、新たな感染症が猛威を振るい社会が一変する中、藝祭もかつての形から姿を変えなくてはならなかつた。一昨年、昨年はオンライン藝祭と銘打ち、どんな場所にいてもアクセスできる藝祭を先輩方がゼロから作り上げた。どういった社会になつても藝祭の火種を消してはならないと、並々ならぬ覚悟の上に作り上げられた藝祭を、私は1年生の夏に企画課員として見ていた。3月、2年生となり、絶やさずに受け継がれてきたその火種を、いよいよ先輩方から手渡された。私は2022藝祭実行委員長として、その旗手を務めさせて頂くこととなつた。

藝祭の運営は藝祭実行委員会によって代々行われており、委員会は十以上の課に分かれ仕事を分担している。その中で、運営を主導する役割を担うのが企画課である。この企画課の課長・副課長・会計が、その年度の藝祭実行委員長・副委員長・全体会計を務める。新体制の役職が決まった3月下旬、企画課で最初の仕事は2022藝祭のテーマを決めることであった。画面を通し、様々なことを考慮に入れながら各々がそれぞれの考えを伝え合つた。その中で、通底していた部分は、社会は一変してしまつたけれど、どういった形であれ「ふれあい」はなくしてはならない、ということであった。私たちのふれあいは形が変わってきたかもしれない、現に画面を通して伝え合っている。講義だって昨年度はオンラインであった。だがどんな形になつても、人と人との、延いては藝術と人とのふれあいは誰にも奪えないはずである。また、この2年間のオンライン開催により、藝祭が開催されていたことを知らない藝大生がいることが、私自身、とてもショックだった。藝祭は、隔てを取っ払い、音楽と美術の学生が絹交ってふれあうことが出来る場である。今年度の藝祭こそは、閉幕した後も皆の拠

## コロナ禍を経た大学美術館の現状——

### 「学生制作品」の収蔵と展示をめぐって

熊澤弘（平成6年芸術学科卒業）

#### はじめに

東京藝術大学大学美術館（以下「大学美術館」）は、1998年4月に芸術資料館からの改組・設置されてから、今年で24年目を迎える。東京美術学校（美校）開学以来の歴史を持つ芸術資料の管理と活用、そして学芸員課程を含む教育を担う大学美術館は、コレクション管理や様々な展覧会、そして教育・研究活動を積み重ねてきた。設置されてから干支で言えば二周り巡った今、大学美術館には開館から変わらぬことと、年月を重ねて変わってきたことが明らかになってきた。この小文では、大学美術館の現状報告として、卒業制作を中心とする近年の作品収蔵・展示に関する話題をご紹介したい<sup>1</sup>。

#### 1. コレクションと施設をめぐる「変わらぬこと」

大学美術館の主たる活動は、上に挙げた通り「芸術資料の調査、収集、保存および管理」である。芸術資料収集と管理の歴史は、美校開学以来の長い歴史を持つ。岡倉覚三（天心）をはじめとする美校創立メンバーは、「実物資料」に基づく教育を重視し、参考となる優れた古美術品を収集してきた。この基本方針は西洋画科など後に設置された学科でも引き継がれ、伝統美術とともに同時代の美術作品も収集された。そのおかげで本学には、国宝・重要文化財23件を含む優れた芸術資料が引き継がれ、現在でも臨写や授業閲覧の手本、つまり教材として活用されている。

芸術資料についてはもう一つ、美校開学から変わらぬ特徴がある。それは卒業制作や自画像をはじめとする歴代の生徒・学生が残した作品群の継続的収集である。1893年7月、美校の最初の卒業生の作品が収集されてから現在まで、学生作品を参考品として受け入れるシステムは続いている。西洋画科（現在の絵画科油画）で始まった自画像収集も、なんどかの中斷を経ながらも現在まで継続している。

貴重な芸術資料を教育現場で活用し、学生の作品を記録として収集し続けることが、本学にとっての「変わらぬこと」であるのは言うまでもない。

#### 2. 「変わりつつあること」：

##### 収蔵規模の拡張、収蔵施設の維持管理

その一方で、年月を重ねる中で「変わりつつあること」もある。学生作品の圧倒的な増加と、それに伴う収蔵施設の維持管理の質的変化である。

すでに記したように、学生の作品（所蔵品登録上は「学生制作品」と呼ばれる）の収集は美校黎明期から始まる。美校初期から伝わる物品台帳によれば、「明治27年4月10日生産 本校」と記載された最初の「学生制作品」は16件であった。これが、美校から藝大へと組織変更した1950年には約3700件、取手校地に芸術資料館取手館（「取手館」）が竣工した1994年には約6400件、そして2022年現在、学生制作品の総数は1万件（うち自画像で6000件以上）を超える規模となっている。

このような学生制作品コレクションは、今まで続くその継続性ゆえに、それ自体が美校・藝大の定点観察記録という性格を持っている。その一方でこの圧倒的な物量と多様性を持つコレクションを、安全かつ適切に管理し続けることが大きな課題となっている。

近年の卒業修了制作展、博士審査展を見れば明らかなように、学生の作品は多様な表現を持ち、大きな展示空間を要する大規模なものが増え、独自の素材・技法が用いられた作品も多くなっている。そしてそれらは長期の保存や将来的な再現を想定していない場合もある。このことは、収蔵する際にあらたな課題として立ち上がってくる。

所蔵品の維持管理は、国内外の美術館・博物館で頭を悩ませている大きな問題であり、大学美術館でも現在進行系の課題となっている。とはいえこの問題に適切に対処する現実的な対策は、収蔵能力を高める、つまり収蔵施設を更新して収蔵スペースの拡大・向上を図る以外はない。この課題はしかし、大学美術館取手館（以下「取手館」）、そして上野本館が竣工したあとも続いていた。

とはいえ、大学美術館はこの数年、この状況の改善に向けての一歩を踏み出す絶好な機会を得ることができた。それは取手館の改修と、本年から始まった取手での新収蔵庫棟建設である。

#### 3. 取手新収蔵庫棟

取手館の改修と新収蔵庫棟建設は、大学美術館にとって長年の課題であった。取手館が開館したのは1994年

11月4日のことであった。昭和・平成初年の芸術資料館にとって、所蔵作品増加に伴う施設の狭隘化・老朽化などの収蔵環境の悪化は大きな課題であり、その解消を目指して建設されたのが取手館であり、開館後には約4000点の学生制作作品が取手館へと移管された。しかし、この取手館もまた今年で27年を迎え、ふたたび収蔵環境の狭隘化・老朽化が問題として顕在化することとなった。

この状況は、学内外の関係者の尽力により、少しずつではあるが改善の方向に向いつつある。まず、2021年度に取手館では、開館以来の大規模設備改修が行われた。そして今年度から、取手館のとなりに、新収蔵庫棟の建設が始まった。竣工は2024年を予定している。積年の課題ではあった施設更新がなされることで、学生制作作品を含めた作品資料を収蔵する能力が高められる余地ができたのである。この事業は、本学関係者の、文字通りの多大なる尽力がなければ可能とはならなかったことであり、その成果が結実される日が待ち遠しい。

とはいっても、新収蔵庫棟によって収蔵環境の問題がなくなるわけではない。むしろここから、所蔵品管理の再編という新たな課題に向き合うことになる。この貴重な芸術資料を未来に継承してゆくためにも、長いスパンで施設と制度を整え続ける必要があるのだ。

#### 4. 近年の「学生制作品」を展示する――

##### 「VIVA」から「買上作品展」へ

以上、大学美術館の収蔵・管理をめぐるやや重い話題をご紹介してきたが、これらの作品の展示に関してもご紹介しておきたい。

「学生制作品」という登録名で収蔵される卒業制作や自画像作品はこれまで、特に近年の作品についていえば、展示・公開の機会は極めて限られている現実がある。定期的に開催される所蔵品展示の「藝大コレクション展」でも、近年の学生制作品を紹介する場合、例外的な存在として展示することが多かった。ただ、美術館の所蔵品管理業務としてさまざまな作品と向かい合うなかで、近年の学生制作品を新たな視点から紹介する機運も高まりつつある。

たとえば、JR取手駅の駅ビル「アトレ」に設置され2019年12月にオープンしたアートスペース「たいけん美じゅつ場 VIVA」<sup>2</sup>には、「東京藝大オープンアーカイブ」が設けられ、そこに大学美術館所蔵の平成以降の卒業

制作が常設展示されるようになった。これは作品展示であるとともに、VIVAの様々な教育プログラムのツールとしても活用されている。

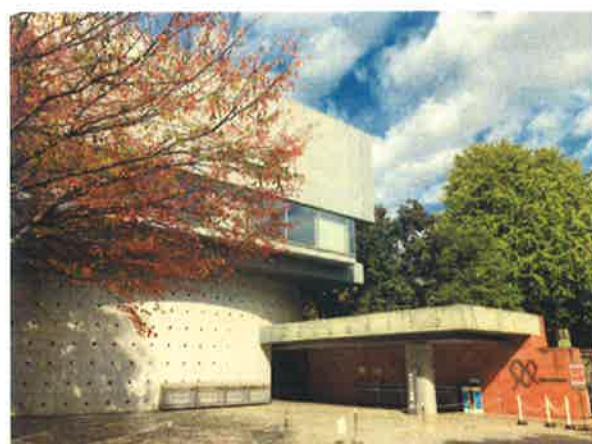
また、大学美術館本館での展覧会でも、学生制作品にスポットを当てることが増えている。これまで、「藝「大」コレクション バンドラの箱が開いた」展(2017年)、「藝大コレクション展2021 第2期」などで、平成・令和の卒業制作に焦点を当てる機会が増えつつあるが、2023年3月末から開催される予定の「藝大コレクション展2023」では、卒業制作の買上制度そのものに注目する予定である。現在、大学美術館では、美術学部各科、音楽学部、映像研究科と協議しながら準備を進めているが、展示の機会のなかで紹介されるだけでなく、それらの作品を通じて、本学で作品買上を行っている意義をじっくり考える機会となるだろう。

本学の教育・研究は、芸術作品の「創作」と「継承」が複雑に循環する「エコシステム」のなかで展開している。そのエコシステムのなかでも「継承」にかかわる部局として、大学美術館のコレクションが適切に継承され、学内外の教育研究に活用されてゆくことを、美術館の「中の人」として強く願っている。

(くまざわ ひろし／大学美術館准教授)

1　近年の学芸員課程の現状については、下記のコラムを参照いただきたい。「藝大リレーコラム「歴史の重みに向かい合う：大学美術館の展覧会・学芸員課程」  
[https://www.geidai.ac.jp/container/column/relaycolumn\\_046](https://www.geidai.ac.jp/container/column/relaycolumn_046)

2 「VIVA」とは、取手市、東京藝術大学、JR東日本、株式会社アトレの四者が2017年5月に結んだ連携協定の成果として生まれたアートスペースのこと。



大学美術館の外観（2022年11月）